

申命記 6章 20～25 節

使徒言行録 第17章 1節～15 節

ヨハネによる福音書 第14章 1～14 節

明日の5月8日から、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが、2類相当から5類相当に移行されます。町を歩く人々の中では、すでにマスク着用の方も減りつつあります。しかし、感染の危険が終了したわけではありませんので、礼拝中のマスク着用は、お願いしたいと思います。ただし、気温も高くなりつつあります。水分補給や息苦しさにはお気をつけください。

さて、先週の「使徒言行録」は、ステファノの殉教の場面でしたが、本日はかなり話が進み、パウロが第二回宣教旅行を始めたところの場面です。前回のステファノの殉教の場面で、「(ステファノを) **都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた**」

(使徒7:58)とあり、まだサウロと名乗っていたパウロが、ステファノの殉教に加担していたように描かれています。その迫害者が、本日の箇所では宣教者となっています。「使徒言行録」は、そのパウロの変化と働きを大きく取り上げているのですが、それは歴史に働く主なる神様の救いの業が、彼を導いたと描いているからです。そうは申しましても、人間の働きを通して働いたので、人と人との間の諸問題もあります。その点も「使徒言行録」は描いています。第二回宣教旅行で、パウロは、最初の旅行の際に共同関係にあったバルナバと、別々に歩み始めるのです。バルナバは、マルコを連れて宣教旅行に向かい、パウロはシラスを連れて、宣教旅行に出かけるのでした(使徒15:36-41)。本日の箇所は、パウロがそのシラスと共に、テサロニケに入った際の出来事です。テサロニケは、都市の名前がアレクサンダー大王の妹テッサロニカにちなんでつけられた都市であり、紀元前4世紀末からあります。パウロの時代でも大きな都市でしたが、現在でもギリシア国内第二の大都市です。

パウロは、このテサロニケでも宣教を行ったのですが、最初に「**ここにはユダヤ人の会堂があった。パウロはいつものように、ユダヤ人の集まっているところへ入って行き**」(使徒17:1-2)とあります。ここでは「会堂」と訳されていますが、実際には建物などはなく、人の集まる集会ということかもしれません。注目すべきことは、異邦人への宣教者として有名なパウロですが、実際には、地中海世界にあるユダヤ人共同体の中で、まず宣教をしていたということです。それは、「**三回の安息日にわたって聖書を引用して論じ合い**」という描写からもわかります。このような行為は、ユダヤ人が対象でなければありえません。パウロの時代、一般的な異邦人が『聖書(旧約)』を読むことはなかったからです。ただし、「**神をあがめる多くのギリシア人や、かなりの数のおもだった婦人たちも同じように二人に従った**」(使徒17:2)とある通り、ユダヤ人の集まりには、ユダヤ教に興味を持つ異邦人、あるいは改宗者も少数いたようです。

パウロのこの宣教の働きは、「**しかし、ユダヤ人たちはそれをねたみ、広場に**

たむろしているならず者を何人が抱き込んで暴動を起こし、町を混乱させ、ヤソンの家を襲い、二人を民衆の前に引き出そうとして搜した」(使徒 17:5) という展開を招きます。かつてパウロが教会の迫害者であったように、パウロの活動もユダヤ教の人々の迫害にあったのです。「使徒言行録」は、もちろん教会の立場で書かれています。これらのパウロの宣教は、ユダヤ教の側から見れば、大きな迷惑であったと思われます。パウロの時代、ユダヤ教も『聖書(律法、預言、諸書)』に基づいて宣教活動をしていたからです。

また、ユダヤ人たちが「世界中を騒がせてきた連中が、ここにも来ています。ヤソンは彼らをかかまっています。彼らは皇帝の勅令に背いて、『イエスという別の王がいる』と言っています」と言うと、「これを聞いた群衆と町の当局者たちは動揺した」(使徒 17:6-8) とあります。この「動揺した」という言葉は、本日の福音書の「(心を)騒がせるな」と同じ動詞です。テサロニケの人々も、パウロの宣教は、今ある秩序を崩すと動揺したのです。しかし、「当局者たちは、ヤソンやほかの者たちから保証金を取ったうえで彼らを釈放した」とありますので、ローマ帝国当局はあまり揺れ動かなかったようです。

この宣教旅行の一場面を見るだけでも、パウロの宣教の困難さがわかります。パウロが宣教活動した世界は、イエス様の活動された世界とは異なっていたからです。その象徴のひとつが「神」という言葉です。この言葉は一般名詞であり、複数形の「神々」にもなります。その中でユダヤ教は、唯一の神を『聖書(旧約)』に基づいて教え、その神様がメシアを遣わすことを教えます。しかし、イエス様「必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていた」(使徒 17:3) と今までと異なるメシアであると教えていたのですから、何重もの誤解を解きながら、説明しなければならなかったのです。この状況は、日本における宣教の困難さと似ているところがあります。

このような異文化との関りによる宣教の複雑さ・困難さを前提としながら、何を信じたらよいのか、その核心部分を強調しているといえるのが、「ヨハネによる福音書」です。本日の福音書は、イエス様が弟子たちと別れを告げる告別説教の部分ですが、わたしたちはここにあるイエス様の言葉を、わたしたち自身に語り掛けている言葉としてとらえることが大切です。なぜならば、ヨハネ福音書は、過去の事柄を語りながら、今、福音書を読んでいる読者に、直接語り掛けているという特色があるからです。

本日の箇所は、イエスが「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」という言葉から始まりますが、イエス様は、今も同じようにわたしたちにも語り掛けています。この十字架と復活の姿から発せられるイエス様の声を抜きにして、教会の宣教はあり得ません。逆に言えば、コロナ禍以外にもわたしたちは、様々な地球規模の混乱の中にいますが、このイエス様の声を聞き導かれるとき、いつでもわたしたちには希望があり、また力を得るのです。

週報に掲載されている通り、東京教区は、今年教区成立100周年を迎えます。その方針の具体化も、イエス様の声を抜きにしては成立しません。これからもイエス様の声を信じながら、みなさまと力を合わせながら歩み続けたいと思います。